

カイツブリ Podiceps ruficollis(鳩)

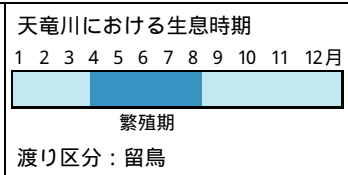


(撮影：戸谷)

識別のポイント

- ・よく潜水する。
- ・カモ類に比べ、首、足、尾が短い。

大き さ：ハトくらい
 生息環境：池、流れの緩やかな川など
 繁殖場所：水生植物の群落内（水面上）
 餌：魚、エビ、水生昆虫、水生植物の種子など
 鳴き声：「ケレレレレ…」など

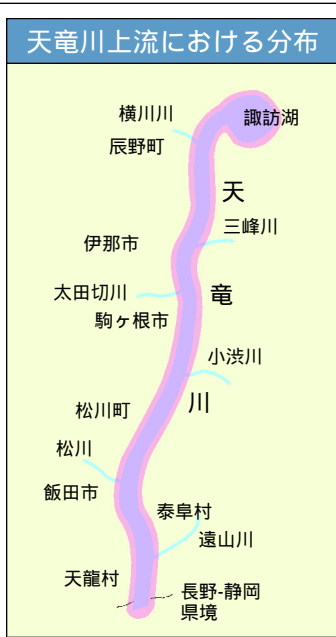


一般習性・分布

- ・留鳥として大きな川や湖、池などに生息する。繁殖期には、ため池や高地の沼など、水生植物群落が発達した水面に多い。
- ・潜水がうまく、餌をとる時のほか、外敵から身を隠す手段として頻繁に水中へ潜る。
- ・ヨシなどの水生植物群落中に「浮き巣」を造る。
- ・カモ類などに比べ足が身体の後方についており、水中を泳ぐのには大変適しているが、地上を歩くのは苦手である。

天竜川上流における生息状況

天竜川は流れが急なため、本川の流路で繁殖できる場所はほとんどない。少数が河川敷内の池やわんどで繁殖している。冬は平岡ダムや吉瀬ダムなどで、カモ類と共に越冬していることが多い。数羽から10数羽の小群で行動し、繁殖期に比べ数も多い。



カワウ *Phalacrocorax carbo* (河鵜)



識別のポイント

- ・全身黒く見える。
- ・群れで飛ぶときは、V字型で編隊飛行する。

大きさ：カラスより大きい

生息環境：河川や湖

繁殖場所：森林内の樹上（コロニー）

餌：魚、エビなど

鳴き声：「グルルッ」「グワッ」など

天竜川における生息時期

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月

渡り区分：留鳥

(天竜川上流では冬鳥)

一般習性・分布

- ・留鳥として主に広い川の下流域に生息するが、分布は局地的。
- ・水中を巧みに泳ぎ、魚を丸飲みにする習性から、長良川の伝統漁法の「鵜飼」に用いられている。
- ・コンクリートブロックや杭などにとまり、両翼を広げて羽毛を乾燥させる行動をとる。
- ・分布は局地的で、大規模なコロニー（集団繁殖地）の周辺に生息するが、営巣木がフンにより枯れたり、周辺の環境の変化によりコロニーの分散や消滅、移動を繰り返す。

天竜川上流における生息状況

天竜川上流では、最近になって姿が見られるようになった（P.28参照）。現在、冬場を中心に平岡ダム付近や南宮大橋付近の流路内を中心に、10数羽から100羽近くの群れが見られる。上流側は箕輪町でも確認しており、今後の分布の動向が注目されている。

天竜川上流における分布



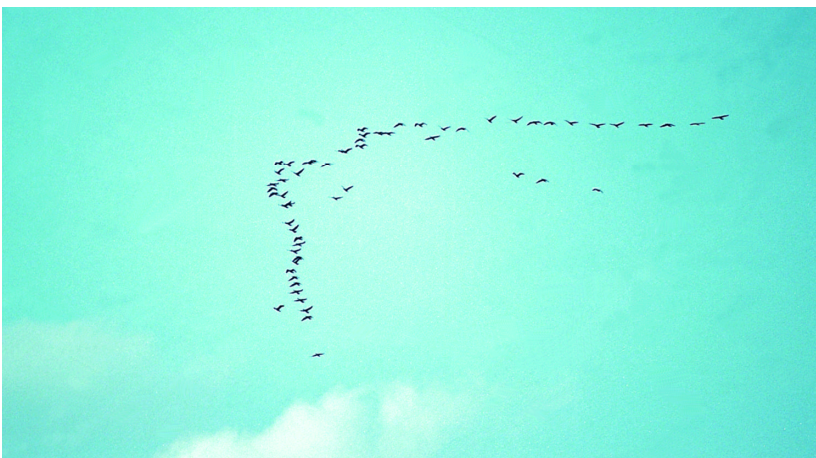
コラム 天竜川に突然出現したカワウ

カワウは、全身が真っ黒い大形の鳥で、魚を主食としています。群れで飛ぶときにはV字型（かぎ型）になって飛びます。これまで天竜川上流で観察されたことはありませんでしたが、数年前から平岡ダム湖で、そして1995年2月から飯田市などの天竜川で観察されるようになりました。時には100羽以上がV字型になって飛んでいるところを見ることがあります。

カワウはかつて本州各地の海岸に近い林で普通に繁殖していましたが、1970年代には繁殖地は全国で2ヶ所、約1,500羽程度に激減し、狩猟が禁止されました。ところが、1980年代になると個体数が急増し、現在は伊勢湾、三河湾を中心に関東から関西にかけて24ヶ所の集団繁殖地があり、個体数は35,000羽と推定されています。このように急増した理由として、1 天敵がない、2 環境が改善されて餌となる魚が増えてきた、3 法的に保護されてきた、の3つが考えられます。

天竜川上流でカワウが見られるようになった理由は、浜松付近の下流部で急に数が増えたため、本来の生息地ではない上流部まで飛来するようになったと考えられます。天龍村や阿南町では、100～300羽の群れが、朝は天竜川に沿って上流へ、夕方は下流側に飛ぶのを何度も観察しています。カワウは繁殖中でも、餌をとるために50km近く移動することもあります。天竜川上流のカワウも、おそらくそのほとんどは下流から飛んできていると考えられます。

（桐生尊義）



編隊飛行するカワウの群れ

ゴイサギ *Nycticorax nycticorax* (五位鷺・夜鴉^{よがらす})

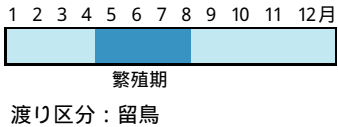


識別のポイント

- ・夜「キャアツ」と鳴きながら空を飛ばす。
- ・首をすばめていることが多く、楕円形のシルエット。
- ・冠羽は白い(よく似たササゴイは黒)。

大 き さ : カラスよりやや大きい
 生息環境 : 河川、水田、湖沼など
 繁殖場所 : 森林内の樹上(コロニー)
 餌 : 魚、カエル、ザリガニ、昆虫など
 鳴 き 声 : 「キャアツ」「ガァー」など

天竜川における生息時期



一般習性・分布

- ・留鳥として川や湖、水田などの水辺とその周辺に生息する。
- ・夕方、あるいは夜中、空を「ギャア」とか「キャアツ」と鳴きながら移動するのはこの鳥である。俗に夜ガラスとも呼ばれ、昼間は河岸や神社の大木などにねぐらをとって、日が暮れると川や水田に餌を捕りに出かける。
- ・首は長いが、常にS字型にすばめており、餌をとるとき以外はほとんど伸ばすことがない。
- ・幼鳥は褐色で全身に白斑があり、ホシゴイなどと呼ばれる。

天竜川上流における生息状況

留鳥として全域で見られるが、夜行性のため繁殖地以外ではあまり目立たない。箕輪町の三日町頭首工(取水堰)上流の中洲に生育するヤナギ林には、コロニーが形成されている。

天竜川上流における分布



ササゴイ *Butorides striatus* (笹五位)



(撮影：戸谷)



ササゴイの巣

識別のポイント

- ・ゴイサギに似ているが、やや小さくて黒味が強く、冠羽は黒い(ゴイサギは白)
- ・水際にじっとしていることが多い。

大 き さ：カラスくらい

生息環境：河川など

繁殖場所：森林内の樹上

餌：魚、カエル、ザリガニ、昆虫など

鳴き声：「キュウ」「キョーツ」など

天竜川における生息時期

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月



繁殖期

渡り区分：夏鳥

一般習性・分布

- ・夏鳥として川や湖、水田などの水辺とその周辺に生息する。
- ・夕方から夜間にかけて活動、採食するが、日中でも頻繁に採食する。
- ・水辺近くのヤナギ、マツなどの樹上に集団、または単独で巣をつくるが、他のサギ類と同じ場所に営巣することはない。
- ・ゴイサギと同じように獲物を待ち伏せて捕らえるほか、浅瀬を静かに歩いて魚を捕る。

天竜川上流における生息状況

夏鳥として渡来するが数はあまり多くない。繁殖地のある箕輪町付近ではよく見られる。三日町のゴイサギのコロニーに近い場所では、数つがいがそれぞれ近接した異なるヤナギの木の樹上に営巣していた。葉によって巧妙にカモフラージュされた巣は、葉が繁っているときは外からまったく見えなかった。

天竜川上流における分布



ダイサギ Egretta alba(大鷺・しらさぎ)

シラサギの中で最も大きい



(撮影：戸谷)

識別のポイント

- ・全身が白く、首が非常に長い。
- ・コサギに似ているが、身体が大きくて足は全体的に黒い。冬はくちばしが黄色。

大きさ：カラスより大きい

生息環境：河川、水田、湖沼など

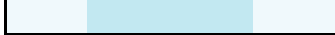
繁殖場所：森林内の樹上(コロニー)

餌：魚、カエル、ザリガニ、昆虫など

鳴き声：「グァー」「ゴァーゴァー」など

天竜川における生息時期

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月



渡り区分：夏鳥(一部留鳥)

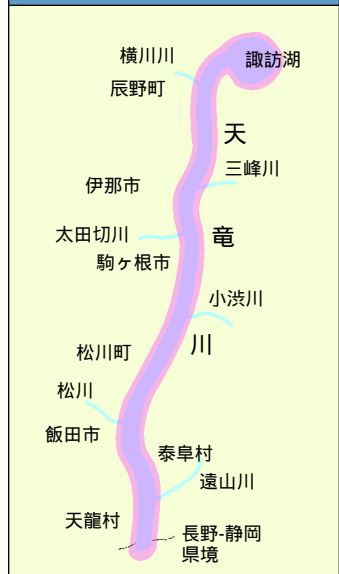
一般習性・分布

- ・主に夏鳥として見通しのよい河川、湖沼などで生活するが、冬は北から渡ってくるものもいるため、地域によっては留鳥である。
- ・全身が白いサギであるダイサギ、チュウサギ、コサギの3種を総称してシラサギと呼ぶが、その中で最大の種。チュウサギやコサギに比べ首が長く、大きく見える。

天竜川上流における生息状況

天竜川上流全域で見られるが、数は多くない。繁殖地は知られていない。単独でいることが多いが、ねぐらの周辺では10数羽で休息していることもある。松川町の鶴部付近では河岸の樹林にねぐらがあり、秋から冬はまとまった数が見られることがある。

天竜川上流における分布



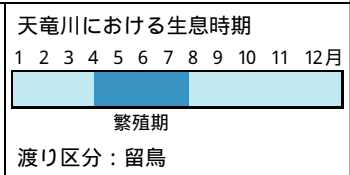
コサギ Egretta garzetta(白鷺・しらさぎ)



識別のポイント

- ・全身が白い。
- ・ダイサギに似ているが、身体が小さくて足指が黄色。年間通してくちばしは黒い。

大 き さ : カラスくらい
 生息環境 : 河川、水田、湖沼など
 繁殖場所 : 森林内の樹上(コロニー)
 餌 : 魚、カエル、ザリガニ、昆虫など
 鳴き声 : 「グァー」「グァーゴァー」など

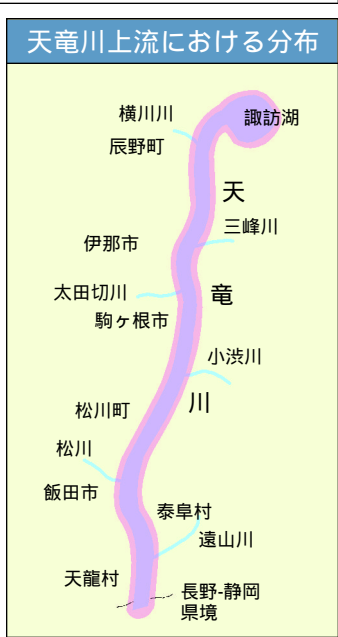


一般習性・分布

- ・様々な水辺に数多く生息するが、大きな川や水田に多い。
- ・浅瀬を活発に歩き回ったり、待ち伏せしたり様々な方法で魚などを捕る。底泥を足でかき回し、追い出された水生昆虫や魚を捕らえる行動も頻繁に見られる。
- ・マツ林、雑木林などの樹上に営巣し、他のサギ類といっしょに集団繁殖することが多い。
- ・集団でねぐらをとる習性がある(P.33参照)。

天竜川上流における生息状況

天竜川上流全域に生息する。かつては内陸部ではあまり見られない鳥であったが、最近では天竜川上流でもごく普通に見られるようになった。上伊那では繁殖が確認されているが、下伊那ではまだ確認されていない。今後分布域が変化する可能性があり、動向を注目の鳥である。



コラム 集団でねぐらをとるコサギ

鳥の中には、秋から冬の非繁殖期の夜になるとたくさんの仲間が集まって、集団でねぐらをとる種類があります。天竜川でよく知られているのは松川町の鶴部の竹ヤブに集まるカラスですが、ムクドリやトビ、コサギなども集団でねぐらをとります。ここではコサギの場合について紹介しましょう。

この鳥は春から夏の繁殖期にはスギやアカマツの林に集団で営巣し子育てを行います。伊那谷では上伊那の箕輪町の段丘崖の林で集団営巣地が見つっていますが、他の地方ではまだ繁殖の記録がないばかりか、この時期にはあまり姿を見ることもありません。

ところが、子育てが終わり非繁殖期になると、それまでは姿を見せなかった飯田地方でも、この鳥が姿を見せるようになります。昼間は天竜川や大きな支流、養魚池の岸边や浅瀬で魚などを捕まえて過ごしていますが、夕方になると近くに住むコサギが1ヵ所に集まってきて、一緒に夜を過ごすのです。これは「集団ねぐら」と呼ばれ、伊那谷には上流の箕輪町付近と中流の飯田市付近に存在します。しかし、ねぐらの場所そのものは年によって変わることが多く、特別の場所に決まっているとはいえないようです（数年同じ場所を利用することもあります）。

飯田市のねぐらの場合は、段丘崖に発達した竹林や神社のスギ林を利用することが多く、それぞれの個体が木の枝々に止まって集団で眠るのです。その場所は必ずしも天竜川に近い場所でなくてもかまわないらしく、川から約3kmもはなれた長姫神社のスギ林とかそれより奥の竹林だったときもあります。いずれの場所も往来が激しいだけでなく、ネオンなどの明かりが多いところです。昼間は警戒心が強く、人間が近付くとすぐに飛び立ってしまう鳥なのに、夜になるとわざわざ人間の生活圏内にねぐらをとるとは不思議なことです。

ひとつのねぐらに集まってくるコサギの数は年により大きく変動します。飯田市のねぐらでは10年以上前は100羽を越していましたが、どうしたのか近年では50～70羽前後に減ってしまいました。昼間は約10km下流の川路から約15km上流の松川町までの天竜川で、1羽ずつ散らばって魚をとっていたそれぞれの個体が、夕方になると決まったようにねぐらに集まってくることはどんな意味があるのでしょうか。研究者の皆さんでもまだわからないようです。

（大原 均）

アオサギ Ardea cinerea(蒼鷺)



識別のポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・全身が青灰色のサギ。 ・首が長く、身体が非常に大きい。
---------	---

<p>大 き さ：カラスより大きい</p> <p>生息環境：河川、水田、湖沼など</p> <p>繁殖場所：森林内の樹上(コロニー)</p> <p>餌：魚、カエル、ザリガニ、昆虫など</p> <p>鳴き声：「ギャッ」「ゴァー」など</p>	<p>天竜川における生息時期</p> <table border="1"> <tr> <td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td><td>7</td><td>8</td><td>9</td><td>10</td><td>11</td><td>12</td> </tr> <tr> <td colspan="12" style="background-color: #e0f2f1;"></td> </tr> </table> <p>渡り区分：留鳥</p>	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12												
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12														

一般習性・分布

- ・日本で最大のサギ。和名はアオサギであるが、英名は Grey Heron (灰色のサギ)である。光線によって、青灰色に見える。
- ・1羽で河岸にじっとしていることが多く、近づくと「ギャッ」と鳴きながら急に飛び立つことがある。
- ・飛んでいるときは首をすぼめている。
- ・単独で分散して採餌することが多く、群れでは採餌しない。
- ・マツや広葉樹の林に集団で営巣し、他のサギ類と集団繁殖することも多い。

天竜川上流における生息状況

天竜川上流全域に見られるが、数はあまり多くない。身体は大きいですが、単独でじっとしていることが多いため目立たない。天竜川流域では繁殖地が見つかっていないが、今後、流域の樹林にコロニーが形成されることも考えられる。

